

アメリカ文学研究と環境文学批評（エコクリティシズム） の観点からのコメント

伊藤 詔子

本書はまえがきで、原爆のみならず核も視野に入れた包括的な「原爆を読む」文化事典を目指したとある。代表的「事件史、論争」を第一部に、社会運動や文化運動に焦点を当てた「表象と運動」を第二部に、「語る／騙る」を第三部に、「イメージ再考」を第四部に配置し、「原爆・核」の表象と言説の全体像と歴史を、70項目にわたり紹介・議論し鋭意分析した充実した事典になっている。巻頭の1「浦上燦祭説」の歴史と現在」に典型的にうかがえるように、各項目の問題の所在、議論の歴史、現在地の検証、参考文献も網羅的で、一つの論争が戦後の原爆をめぐる諸領域の言説を横断していくさまがよくわかる。また第一部のように大きな問題系と関わる項目から第四部のように一つの表象やイメージをめぐる項目まで同じスペースを割り当てることで、記述手法の一貫性があり、客観的な編集になっている。今後原爆と文学・文化を幅広く考える際必携の参考書となりナビゲーターとなる（読

む事典）である。また膨大な仕事を、あとがきで「実動部隊」と呼ばれる科研メンバーが支え、編者の力技でまとめてあり、チームワークとリーダーシップを感じさせる本となっている。多くの論者がいながら一冊の研究書の美質も備えたもので、この分野の座右の書になっていくと思われる。原爆文学研究会（二〇〇一年創設）のこれまでの研究と活動、問題意識の結実として、編者と著者の方々の比類のない努力の結晶である。ことに機関誌『原爆文学研究』による研究深化が、四部構成の拡がりと同様性を生み出している点に、これまで出た原爆文学関連の事典にはない読み応えを感じさせる。字数の関係でごく一部にしか言及できないものの、各項目の記述や書誌からさまざまなお教示や示唆を受けた。本書は原爆文学だけではなく「核に関する文化的事象の堆積を検証する」企画であり、幅広い文化論の観点の内包する「開かれた教養書」でもあるとされていることから、またあれから七三年後

の世界の核化の拡大や危機的状況、また核実験や原発事故による健康被害の中、核の危機が政治的状況により複雑構造化し、グローバル化している現在、編者もまえがきで述べられるように、新たな「アクチュアルな問い」や付言すべき内容、扱うべき新たな項目を喚起することも事実である。その際、本書の契機となっているのが、研究会が連続して取り組んだ「戦後七〇年連続ワークシヨップ」の開催であった。戦後七〇年の核批評の現況について、筆者の研究分野であるアメリカ(文)学と環境文学批評(エココリテイシズム)の観点から、被爆七一年目の事件として、オバマヒロシマ・スピーチについて述べてきたとき、本書の各記述との関連にも触れてみたい。世界を核時代に陥れ、世界の核の半数を所有しているアメリカではあるが、本書ではアメリカは周道的に扱われるのは当然のことなので、拙稿はないものねだりのコメントとなることをお許しいただきたい。

1. 被爆七〇年目の真実統報

二〇一五年は、被爆七〇年目の真実といった形で多くの被爆体験を語る記憶の書、写真集、歌集、また随筆などが出版されたことは、『原爆文学研究』の書評特集でも述べた。特に原爆投下について米歴史家と日本の教育者の討論の記録『日本人の原爆投下論はこのままでよいか』(日新報道)、公開された新たな機密文書により原爆製造過程を読み解くジム・バゴット『原子爆弾1938〜1950』(作品社)、一九四三年から遡った歴史と八月六日の記録を合体させた『原爆の落ちた日決定版』(PHP文庫)等々

も加わった。これは生き残った六人についてのナラティブから成るハーシーの『ヒロシマ』とは違って、原爆製造史と八月六日に亡くなった六人の記録である。賛否はともかく原爆についていわゆるヒロシマ・ナラティブとして世界で流通したハーシーの『ヒロシマ』は、この作品の成立と受容や再版と翻訳プロセスや日本での評価の歴史など、ヒロシマの諸問題が交錯する場として、この事典でまとめて読めればありがたいと感じられた。

また原爆文学研究会戦後七〇年の国際記念大会を特集した『原爆文学研究』一五は、多彩な論考を満載している。なかでも台湾の作家で民族運動家、シャマン・ラポガンの講演録「大海に浮かぶ夢と放射能の島々」(七六―八五)は、現在のグローバルな核状況をアジアの境界作家の視点から鮮明に映し出している。戦後世界に拡散した核と核廃棄物とその汚染の現場が、圧倒的に先住民族の居住区や島嶼部であることの認識を促す。この点では、本書20の「先住民権利運動」が、アメリカ南西部の国内植民地的状況を伝えて興味深かった。18「反・核兵器」の運動と「反・原発」の運動」で日本の状況が分かった。核汚染と核廃棄物処理の問題は核保有の西欧諸国が核実験を行ったマーシャル諸島や、ニュージーランドやオーストラリア等太平洋とアジア諸国に及んでいるので、さらに世界的視野での項目も必要かもしれない。

被爆七一年目、伊勢志摩サミットで来日したバラク・オバマの現職大統領としては初めての広島訪問は、大統領がその前に立った慰霊碑を中心に(原爆)の歴史化に向かってさらに大きく動き始める契機となった⁶⁾。本書2「慰霊碑文論争」によって、議論の多い主語なき慰霊碑「過ちは繰返しませぬから」の解釈史に

ついで多くの教示を得た。二〇一六年五月二七日のオバマ大統領の広島来訪は、サミット後の政治的な首脳外交の展開の一部であったとともに、世界の核をめぐる言説の、ヒロシマ、ナガサキの捉え方の変化に呼応して起きた歴史的な事件でもあったので、第一部の事件史に組み込むことも可能であったのではないかとおもわれる。大統領を広島に招きよせた背景には、以下で述べる、ヒロシマ、ナガサキの世界のメディアでの次第に強まるプレゼンスがあった。まず今世紀になっての核批評の変化をみて、それを念頭にオバマのヒロシマ・スピーチの声を捉え、その英語を文学の言説として検討し、このスピーチが最近の環境文学の言説とも通底していることを考えたい。

2. ヒロシマ、ナガサキのメディアでの拡大する現前

核批評の現在に至る軌跡については、共著『核と災害の表象』で考察し(伊藤 二〇一五 五―二五)、また特に二一世紀の核批評の動向と環境思想との関連については Oxford Research Encyclopedia の拙稿“American Nuclear Literature on Hiroshima and Nagasaki”(ITOH 2017)で述べた。そこで強調したのは、レイチエル・カーソン(Rachel Carson)の環境的終末の表象が、核による終末の表象と結合して、二一世紀女性環境作家に継承され発展していることであった。その後核批評の一翼を担う環境批評(エコクリティシズム)の展開は、脱アメリカの方向を強め、政治的文化的核批評と結合して複雑な様相を呈してきた。大統領のスピーチと二一世紀の核文学は、ジャンルを超える核言説として社会に大きなイ

ンパクトを与えた。オバマの広島来訪は、二一世紀原爆を巡る世界の核批評に、ヒロシマ、ナガサキへの意識の変化が起こり、二つの都市の名前を様ざまな言説が浮上させ、特にヒロシマへの言及がしばしばみられるようになったことと無縁ではない。アメリカ文化における核をめぐる意識や言説の変化のプロセスは、別のところで書いたので省略するとして、戦後核の徹底した情報不開示の中で極めてドメスティックで限定的な形で始まり、冷戦時代の核文学では、情報の制限から核そのものへの奇妙な沈黙とベトナム戦争のトラウマというテーマの圧倒から、核への恐怖は依然として限定的な関心にとどまり、ヒロシマとナガサキへの言及はなお希薄であった。本書36「アメリカ大衆文化と『核の神話』」は、冷戦期から冷戦後のダリの核絵画、アメリカ映画やゲームにみられる大衆文化の核への動向を詳細に辿り、「核テクノロジーを實際の脅威としてよりはむしろモチーフ」とみて、核の「平凡化」そして「無関心」(二二四)へと流れたことを過不足なく指摘している。

しかし一九九〇年代のマンハッタン計画関連資料の情報開示とともに、西部の環境保護運動や環境作家の力でアメリカ市民の核意識は変質してくる。冷戦後小説の中では核のテーマが多様な展開をみたことが、二〇〇八年のダニエル・コードル(Daniel Cordle)『サスペンスのステイト―ニュークリア・エイジ、ポストモダンリズム、アメリカの小説』で詳細に論じられている。コードルによると核兵器は広島と長崎以降は使用されていないが、冷戦構造が核のホロコーストの未決の恐怖をサスペンスの形で時代を決定的に特徴づけ、ドン・デリーロ、ポール・オースター、トマス・ピ

ンション、カート・ヴォネガットのような日本でも翻訳されて学生に人気のあるポストモダン主流作家に、いかに核汚染と核の終末への不安のテーマが深く浸透しているか分析される。日本のアメリカ文学者は原爆文学よりもこうしたアメリカ作家から核のテーマを知る傾向があるほどである。

世界への核拡散による緊迫した二一世紀の世界情勢によって、ヒロシマ、ナガサキと原爆への意識は隠蔽された記録の中から浮上してきた。福島原発事故によって追憶のあなたに追いやられていた市民の被爆都市の記憶が呼び戻され、日本だけでなく世界のメディアの中でヒロシマ、ナガサキの歴史は日常的に繰り返し議論され映像化されるようになってくる。一方で八〇年代半ばから高まった環境正義エコクリティシズムや被爆についてのノンフィクションのなかで、ヒロシマ、ナガサキをアメリカ作家が真正面からテーマとし始めたことがある。マーク・カミンズキー (Marc Kaminsky) の『ヒロシマからの道』(The Road from Hiroshima)、日本を含む世界の詩人の一三四編もの原爆追悼詩集『アトミック・ゴースト』(Atomic Ghost: Poets Responding to the Nuclear Age, 1995) や同じ編者、ジョン・ブラッドレー (John Bradley) による『核読本』(Learning to Glow: A Nuclear Reader, 2000) もでた。また戦後七〇年にはスーザン・サザード (Susan Southard) 『ナガサキー核戦争の後』(Nagasaki: Life after Nuclear War)、チャールズ・ベルグリー (Charles Pellegrino) 『地獄からの生還』(To Hell and Back: The Last Train from Hiroshima) が、被爆時の広島と長崎をテーマとしたノンフィクションとして出版された。その間アメリカ西部のカソンの衣鉢を継ぐ女性環境作家たちは、「核のフロンティア」と呼

ばれる地域で、かつてのフロンティア小説に代わり、自らと家族や部族の身体の核汚染というテーマを前景化し、「核の風景」の西部を物語るようになった。ネヴァダ核実験場やウラン鉱採掘廃坑など、目前の土地の核物質による荒廃が改めて人種を問わず西部環境作家のテーマとなる。特にネヴァダ核実験場の反核文学は、本書にとっても重要な項目の一つとなったのではないかと考えられる。

3. 解体批評から核批評へ

3・11後の本格的核批評として、二〇一三年の『フォールアウトの沈黙ーポスト冷戦世界における核批評』を挙げる事ができる。すでに触れたコードルも含む代表的な論者二人の中には、冷戦後其々一冊を上梓しているピーター・シュヴェンガー (Peter Schwenger) やジョン・キャナディ (John Canaday) らもいて、ジャック・デリダ (Jacques Derrida) の「アポカリプスはまだないー全速力で前進」七発のミサイル、七つの文書」(“No Apocalypse, Not Now: Full Speed Ahead, Seven Missiles, Seven Missives”) が発表された一九八四年のコーネル大学での核批評会議がもとになっている。とはいえ『フォールアウトの沈黙』序章においては、各論と高名なデリダ論文との距離と質の違いが強調され、この論文集は、高踏的な解体批評に核の問題を委ねるのではなく、世界史の現実を意識する「核批評の新しい波のための倫理的アジェンダ」(2) 形成を目指すとする。序章は「二〇一一年三月十一日、ハーシーの『ヒロシマ』を講読する授業のさなか、マグニチュード九強の東北大地

震の津波破壊の映像がTVから流れ、それは直ちに広島島の破壊の像と重なった」と始め、続くフクシマの原発事故が再度原爆への言及を浮上させるとし、その後続くヒロシマ、フクシマの歴史的連続性の議論の先鞭をつけた。デリダ論文は核批評(nuclear criticism)という言葉を提唱した重要な論文であるとともに、周知のように「ヨハネ黙示録」の「最初にスピードがあった」から始め、七つの手紙を七つのミサイルとみだてて「今のところ核戦争というものが起こったことがないという限りにおいて、核は信じがたい程のテクスト性『fabulously textual』を備えた現象である」とする(23)。この論文はヒロシマ、ナガサキという地名に全く言及はなく、Atomic Bombという語もない。

二一世紀になつて核批評は、解体批評的核議論からは距離を置き、この動きはやはりケンブリッジ大学から二〇一〇年に大幅改稿の再版本がでたジョン・マシューズ(John Mathews)の外交史研究『ヒロシマ以後—アメリカ、人種、アジアにおける核兵器一九四五年から一九六五年』等とも連動していく。ここにはヒロシマ、ナガサキの歴史的事実をベトナム戦争も含むアジア的现实から核批評に向かわせ、ポストコロニアルな西欧的歴史観からの脱却が図られる。「日本の原爆文学の多くがヒロシマとナガサキを決して脱構築できない原点として描いているとしたら、その不在が西洋の核文学、核批評を特徴づけている」(二谷 二四)のであるが、元来この分野の基本図書であったロバート・リフトン(Robert Lifton)の名著『ヒロシマを生き抜く—精神史的考察』(一九七一)は、早くから被爆地そのものを調査・研究した。24 「英米文学者と核時代」で辿られた中にはないが、リフトンの名著は

広島大学の世界的チヨースー学者、榊井廸夫教授らの訳業によって知られていた。二〇〇九年岩波現代文庫の増補再版がでた。英訳された原爆文学も含む膨大な世界の核文学の書誌を完備し、その後の英語圏での原爆文学研究に貢献したポール・ブライアン(Paul Bryan)の『核のホロコースト』などとも結合して、新しい動きとなつていく。この二作は原爆をナチのホロコーストと併置し、リフトンは序文で原爆文学は被爆者の英知が生み出したものと評価している。J. W. トリート『グラウンドゼロを書く』とともに、この三冊の名著は、これまで抽象論に傾きがちであった英米の核批評に、原爆文学とヒロシマ、ナガサキを組み込むことの重要性を指摘し原爆を絶対悪的ホロコーストと捉えている点で共通性がある。これらは、基本的にユダヤキリスト教的世界観からする、原爆を西欧的理想力を形成してきた聖書の物語枠から捉えその延長線におこうとする、原爆の非歴史化に代わる大きな動きと言える。本書37「核SFと核批評」でこの問題を扱った野坂昭雄によると、トリートはデリダの論文を「一つの歴史的事実を實體のない未来へ絶えず繰り延べするようなもの」で、核戦争を起こらなかった何かとして語る「アメリカ知識人の歴史と見合っている」との批判を紹介している(野坂 二〇六)。

ヒロシマの歴史化を支えるもう一つの批評的勢力は、人新世を生きている環境批評の物質論的動き、マテリアル・エコクリティシズム(maternal ecocriticism)の台頭である。マテリアル・エコクリティシズムは、物語られる物質として地球にアプローチするが、放射線(radio activity)は最も重要な不可視の、すべてを支配する物質で、ティモシー・モートンの超物体(hyperobject)の概念の

比喩的モデルをなし、モートンの環境批評的地球の現況認識の中でも核物質の重要性がキーとなっている。環境の概念は絶えず変化してきたが、温暖化同様核についての思考を欠く場合はノスタルジックな過去の環境観になるであろう。このように各分野からヒロシマ、ナガサキを経験知から語り、世界の核物質汚染やその危険を踏まえた独自の文化的主体性からの核批評が重要になってくる。これらの動きは大きな意味で核の歴史的現場であるヒロシマとナガサキへ注目を集中させ、間接的にしろアメリカや世界の世論を長年かけて変化させ、オバマ大統領をグラウンドゼロ、ヒロシマへと招きよせた地下水脈を形成してきたといえるだろう。

4. オバマ大統領のヒロシマ・スピーチと広島場の感覚

オバマのヒロシマ・スピーチはすでに様々な分析がなされてきた。低迷が言われる大学の英語授業のテキストとしても、日本社会で大きな需要のある演説であった。しかも以上の変化を体現したかに見えるオバマ・スピーチに内包された歴史性は、環境文学批評（エコクリティシズム）から分析することで、新たな意義が発見できる。ここでは「広島場の感覚」の体現、オバマの語法、核を物語ることとアメリカの歴史の再物語化という三点に着目する。勿論大統領のスピーチはスピーチライターが作る公的なものだが、最終的には大統領自身が構想し、仕上げもすることが知られている。

(1) オバマの「Hibakusha」の用法と死者の個別性への着目

二〇一八年には英語となって国際的メディアで頻用される「ヒバクシャ」を、オバマはスピーチで2回使っている。本書でも関連語として5「ひばく怪獣」、53「被爆マリヤ」、56「ケロイド」があるが、「hibakusha」こそ注目すべきことばである。NEDは二〇〇四年の新聞記事からの初出を挙げているが、実際には六〇年代上記リフトンの本では頻用されている。Hibakusha(被爆者)とは辞書的には以下である。

Hibakusha is the Japanese word for the surviving victims of the 1945 atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki. The word literally translates as "explosion-affected people" and is used to refer to people who were exposed to radiation from the bombings. (NED, 下線伊藤。以下の引用同)

オバマのスピーチが先鞭をつけたといえるかどうかはともかく、二〇一八年七月にニューヨークで批准された「核兵器禁止条約」にも hibakusha と使われているし、ノーベル平和賞を得たICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)の受賞理由にも hibakusha が使われている。つまりこの独特の響きを持つ語は原爆被害者(victim of Atomic Bomb)に代わり、最近では世界中で使われるようになったといえる。この語のオバマの二カ所の文脈は以下である。

Mere words cannot give voice to such suffering, but we have a

shared responsibility to look directly into the eye of history and ask what we must do differently to curb such suffering again. Someday the voices of the hibakusha will no longer be with us to bear witness. But the memory of the morning of August 6th, 1945 must never fade. That memory allows us to fight complacency. It fuels our moral imagination. It allows us to change.

..... We see these stories in the hibakusha: the woman who forgave the pilot who flew the plane that dropped the atomic bomb because she recognized what she really hated was war itself; the man who sought out families of Americans killed here because he believed their loss was equal to his own.^②

オバマの声明に使われた hibakusha という (英) 語は、従来の survivor of Atomic Bomb という一般的な英訳では代替できない日本語固有の文脈を内包する。hibakusha は、ケロイドを負いゆがんだ身体や、肉体的苦しみや貧困、死に至る原爆症や当時行われた差別による心理的苦痛など、原爆による犠牲者を他の戦争爆撃や犯罪被害者や天災被害者と区別する言葉であり、英語の語彙にはない独特の日本語をそのまま英語表記し日本文化的ニュアンスを伝えるという意味で、被爆者を日本語の文脈の中で理解しようとする動きを英語母語話者に起こさせる。リフトンはこれを原爆被害者が蒙った独特の肉体的・精神的・経済的困窮を示す言葉であったとし、その著書で、「survivor」を六二二回、hibakusha を三四二回使用している。又日系ハワイ作家ジュリエット・コウノは、英語の原爆小説 *Anshu* (『暗愁』) の中でケロイドに歪む身体を持

つ主人公の被差別感を表現する際これを使っているが、アメリカ大統領が、批評家や作家同様ヒロシマ・スピーチのなかでこれを使った意味は大きい。

とうのも hibakusha の複数形はまだ見かけないので、この語は集合名詞として一人ずつを認識しない語であるが、オバマの被爆者への言及は決して集合的なものではなく声や物語と一緒に使われ個別的である点も注目できる。原爆による即座の死者数は現在でも不明とされ、概数が出ているだけであるが、オバマが「一〇万人を超える日本の男性、女性、子どもたち、数千人の朝鮮半島出身者、十数人の米兵捕虜の死を悼むためだ。犠牲者の魂は語りかける。私たちは何者か今後、どうあるべきか内面を見つめ見極めるよう語りかける」というとき、そこには原爆が敵も味方もなく、すべてを殺すという無差別な殺戮性と、死者たちは米国兵士や朝鮮半島出身者も含む一人ひとり個別の死を死んだという認識があり、集合的な呼称であった hibakusha と、死の個別性のできる限り見つめようとする死者に寄り添う発想が感じられる。

(2) 広島の場合の感覚

場所の感覚は、環境文学のキー概念とされてきた。環境文学は場所が喚起する固有の感覚から物語が展開し、しばしば場所の文学とも呼ばれてきた。そこには場所が自然を育み物理的歴史的政治的様々な局面で持つ複合性への感覚とともに、土地そのものが語る物語に耳澄まし、それを感受する自我を通して場所を語る謙虚な感覚があり、オバマの「広島の場合の感覚」には、環境文学

の場所の感覚に近いものが以下のように語られており、*place* という言葉の二度の繰り返しも注目に値する。

Why do we come to this place, to Hiroshima? We come to ponder a terrible force unleashed in a not so distant past. We come to mourn the dead, including over 100,000 in Japanese men, women and children; thousands of Koreans; a dozen Americans held prisoner. Their souls speak to us. They ask us to look inward, to take stock of who we are and what we might become.

引用五行目にあるようにオバマには、見えないもの、霊のリアリティへの確信があり、霊の言葉に耳傾ける、死者の声を聞く、見えないものとの対話を認知する態度がある。これはお盆や灯笼流しなど日本的な伝統にある霊の存在、霊からの生者への呼びかけを信じる心でもある。場所の感覚は下線部「自分が誰か、どうなるのか」といった実存的問いとも結びつく。ここでオバマは少くとも、即死者の骨が埋まっている場所に立って、長い歴史の果てに被爆した広島の一場所の感覚」に近づこうとしている。スピーチの中で九度くりかえされた *Hiroshima* は、従来カタカナで表記されてきたが、漢字で広島と書くときには広島が軍都として果たしてきた長い日本の歴史内での位置づけや、七つの川に洗われて発展してきた地理的文化的特質、原爆ドームの産業奨励館に象徴される、明治以降近代化の怒涛の波に乗る帝国の戦争への道の認識なども内包する。丹下健三設計広島市建設の平和記念公園の意匠そのものが、原爆資料館、慰霊碑、奨励館廃墟を一直線に結ぶ

一種の矛盾の政治的空間であり、日本では中世から伝統的な墓のかたちである後円墳の埴輪を等身大にかたどるきわめて日本的な意匠のうちに、戦前の西欧化とナショナリズムを隠蔽忘却しつつ、戦後の原爆と平和というパラドックスを一举に結合して記念する「平和記念公園」へと変貌していったものである。本書「まえがき」で触れられる米山リサの『広島―記憶のポリテクス』によると、「広島」の記憶は戦前の大日本帝国、その植民地主義的行為、そしてそれらの帰結の深刻な曖昧化の上に成立している」(四)と批評している。

Sense of Place とは、日本語の地霊(*genius of place*)にも近い言葉で、自分個人のおずかり知らぬ土地の歴史をも認識し、場所が負ってきた歴史的痕跡や地理的風土の堆積と意識を一体的に感受したり、ときには土地の真の歴史を垂鉛する態度である。それは個に存在の基盤を置くアメリカ的意識とは遠い、多分に非西歐的なものでもあり、ケニア出身の父親を持つオバマの非西歐起源の感覚と通底しているともいえないだろうか。この場所についてオバマは以下のように述べる。

That is why we come to this place. We stand here, in the middle of this city, and force ourselves to imagine the moment the bomb fell. We force ourselves to feel the dread of children confused by what they see. We listen to a silent cry. We remember all the innocents killed across the arc of that terrible war, and the wars that came before, and the wars that would follow. Someday the voices of the hibakusha will no longer be with us to bear witness.

But the memory of the morning of August 6th, 1945 must never fade. That memory allows us to fight complacency. It fuels our moral imagination. It allows us to change.

この部分は段階的に、場所の感覚、記憶の召喚から道徳的想像力へと向かっているのがわかる。次の引用はスピーチの締めくくりの部分“moral awakening”を呼び起こすところで、おそらくここは、「道徳的想像力」の結果として、日本人よりもアメリカ人に呼びかけたといっていだろう。アメリカ文化には定期的に社会全体に道徳的覚醒運動が起きてきたことを想起させる。“Great Awakening”第一次大覚醒は一七三〇年代と一七四〇年代にアメリカの一三の植民地に広まった宗教再生運動（First Great Awakening）で、第二次大覚醒は、一八〇〇年代から一八三〇年代の二番目の大きな宗教再生運動であった。このリバイバルは、実はキャンプ・ミーティング（野営天幕集会）などの形で更新されていくのであり、オバマはアメリカで定期的に起きてきた覚醒の伝統を、このときアメリカにこそ求め、呼びかけていることになるのではないだろうか。この被爆者慰霊は、政治的キャンプ・ミーティングともいえるのである。こうした解釈があまりに楽観的だという反論はあるだろう。しかしオバマの発した言葉の強いメッセージ性は、広島の場合の感覚に根差すものであることは、否定できないであろう。

このように、オバマは広島という場所の感覚、重なり合って焼死した死者の魂の声に耳傾ける姿勢が語られ、場所の感覚が促す「道徳的目覚め」へと言及したのであった。かつてエノラゲイの

ターゲットとなった丁字型の橋、相生橋とその周辺で即座に焼かれて骨も蒸発した人々と、土を七〇センチ掘ると無数の骨が埋まっている中島町の平和公園内と産業奨励館の残骸である原爆ドームという場所は、世界の人々や要人が絶え間なく訪れ、立場を超えた参拝と祈りによって日々平和のメッカとしての場所性と政治性を蓄積・更新しているのである。一見素朴さを装ったオバマの修辭法は、少なくとも広島複雑な場所性にも照応するものであった。

さらにオバマ大統領の一四四一語から成る声明の最後の一節は“The world was forever changed here.”として、核がもたらした世界に対する意識の変革を世界に呼びかけるものとなった。

The world was forever changed here. But today, the children of this city will go through their day in peace. What a precious thing that is. It is worth protecting, and then extending to every child. That is the future we can choose—a future in which Hiroshima and Nagasaki are known not as the dawn of atomic warfare, but as the start of our own moral awakening.

ここでオバマは、広島の場合の感覚を倫理的覚醒の出発点と述べることで、アメリカ社会に何度か繰り返された覚醒の歴史を彼が今立つ、ヘヒロシマで展開しているとみることができ。改革精神で大統領に選任されたオバマは、本質的に意識の改革を信じる人なのであり、それが彼の政治的弱さだという人も勿論いるが、環境文学がこうした悔恨と覚醒の瞬間を持ち、その瞬間の持

統を呼びかけることは、ヘアルド・レオポルドの悔悛⁶⁾としてよく知られている。

(3) 核の歴史化とアメリカの再物語化

「死が空から降ってきて、世界は変わった」で始まるこのスピーチに顕著なのは、核の語りと祈りの物語の共有と、それらを代々の大統領の修辞であった「独立革命のアメリカの物語」と接合しようとする動きである。現在の政権では考えられない特質が、一九六〇年代よりのアメリカを形成してきた公民権運動と人権思想から生れ出たオバマにはあった。このスピーチで最も顕著であったのは、上で述べたような原爆とアメリカの関係のみなおしを含む書き出しにこそあったといえよう。勿論スピーチはアメリカ大統領の立場を守る政治的には保守気質のものであったかもしれないが、アメリカに一九四五年当時より国論を二分していた原爆投下批判論と、正当化論の戦後の長い歴史を、一挙に止揚する形で以下の書き出しが繰り出されたといえるであろう。⁵⁾

Seventy-one years ago, on a bright, cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed. A flash of light and a wall of fire destroyed a city and demonstrated that mankind possessed the means to destroy itself. Why do we come to this place, to Hiroshima? We come to ponder a terrible force unleashed in a not so distant past.

原爆による爆撃は、従来「原爆を投下する」「原爆が投下された」という風に一般的に他動詞、投下するが使われてきた。オバマの表現「死が空から降ってきて、世界は変わった」(自動詞 change の be 動詞による完了形はやや雅語とされている)という表現には原爆投下を選択した当事国の大統領の歴史認識ではなく、むしろそこから身を引いた、どちらかというと第三者的表現がある。あるいは雨や雪や雷が降ってくるように原爆を災害の様に表現する原爆の無害化、御伽噺化とも批判できるかもしれない。しかしこれは現地に訪れた大統領のレトリックとしては、一九四五年八月六日、投下後一六時間でおこなわれたトルーマン大統領のいわゆる「原爆投下宣言」を強く意識してのことであったと推測できる。トルーマン宣言は以下のように始まっている。これは戦時中の軍司令官の文書で地名はまだ伏せてある。

“Sixteen hours ago an American airplane dropped one bomb on xxx, an important Japanese Army base. That bomb had more power than 20,000 tons of TNT. It had more than 2,000 times the blast power of the British “Grand Slam,” which is the largest bomb ever yet used in the history of warfare..... The Japanese began the war from the air at Pearl Harbor. They have been repaid manyfold. And the end is not yet. With this bomb we have now added a new and revolutionary increase in destruction to supplement the growing power of our armed forces. In their present form these bombs are now in production, and even more powerful forms are in development. It is an atomic bomb. It is a

harnessing of the basic power of the universe. The force from which the sun draws its power has been loosed against those who brought war to the Far East.⁵⁾

有名な文書でよく知られているように、全体と特に最後の二つの文にある原爆を「宇宙の力から引き出された極東の悪の枢軸に向けられた正義の火」だとするくだりは、スピーチライターであった亡命ユダヤ系新聞記者、『ゼロの暁』の著者ウィリアム・ローレンス(William Laurence)の発想を特徴づけており、ユダヤキリスト教的な世界観から世界を二分し、他者化と敵対化を行う軍事的かつ政治的言説の骨格をなしている。本書23「外国人記者の被爆地ルポ」および永川とも子の「1945年の創世記―ウィリアム・L・ローレンスの広島・長崎関連記事にみる「宣教」としての原爆報道―」によると、ローレンスは「「原子爆弾」という概念に全能の力を持った神のイメージを投射することで、暴力的権力への強力な対抗軸としての意味付けを行なった」のであり、「原子力という新たな宇宙の力に神を見出した一人の亡命ユダヤ人と、第二次大戦期にアメリカが欲した物語は、ここに奇妙な一致をみたのである」(二二八)ということになる。オバマのいう「それほど遠くない過去に恐ろしい力が解き放たれた」とする書き出しは、長らくアメリカを縛ってきたローレンスの修辭を、恐ろしい力を受けた側から解体し、むしろ共感を求める物語的言説によって、トルーマン宣言に対抗する核の七一年目の歴史の共有ということだともいえる。

ここで指摘したいのは、オバマのスピーチで頻用されたもう一

つの言葉が「物語」story という言葉であったことだ。この点はいくくのメディアで論者が批判したように立場によつてはこのスピーチの甘さや身勝手さの論難につながるが、「story」という語はスピーチの要所要所に使われ、被爆者の物語を「我が国の物語」へと以下のように接続しているのが見て取れる。「我が国の物語は単純な言葉で始まった。『全ての人は平等で生命・自由・幸福を追求する権利を与えられている。』この理想の実現は米国民同士でも決して容易ではない。しかしこの理想は努力して追い求めるべきだ。大陸や海を超えて共有される理想だから。人間にはかけがえない価値があり誰の命も貴重だ。私たちは人類という家族の一員だとする根源的な考えこそが私たち皆が伝えなければならぬ物語だ」。

こうした物語の共有は、実はオバマの側からアメリカの物語の共有を提案していることから、平和記念公園と世界中のメディアの向こうにいる聴衆との間の、相互的なものとなっている。このスピーチにある文学性は、こうした物語の共有の相互性から生まれると思われる。それは文学が目指すものであり、作者は物語を提示し読者と共有しつつ、読者の側もそこに自らの物語を重ねて紡ぐ。広く報道されたように、原爆資料館と子どもたちへの「お土産」として、大統領自らが折つた二対の折鶴がその形象化であった。平和公園の折鶴には、長い折りの物語があり、佐々木貞子の折りの像もある。石碑には「これはぼくらの叫びです。これは私たちの折りです。世界に平和をきずくための」という碑文が刻まれ、この像の建立に向けた活動や完成までの道のりが紹介されている(『サダコと折り鶴』、二〇〇一年)。佐々木貞子が自ら折

った和紙の折鶴に模した大統領の折鶴は、大統領が少なくともその物語を共有したいとする気持ちの、何よりの表明であった。実際オバマの英語で注目されるのはヒバクシャという語の使用と、大統領がアメリカの物語だけでなく被爆者の物語を共有したいとする表現が、(ヒロシマ)という場所の声に耳傾けそれを自らの体験として語りたいとする(場所の物語の共有の宣言)であった。それはある意味で、作家がヒロシマをテーマとして物語化するのと同じ文学的営為であったともいえる。

最後にメディアと共に生きる現在、このスピーチ最大の事件に触れたい。オバマの慰霊が立場を超えて人々の胸に刺さったのは、実は当日と翌日のメディアを等しく飾ったハプニングの映像であった。秒単位で緻密に準備された訪問行事には、いくつか人間の予想や計画を超える時間の流れもあった。大統領との出会いに感極まって体が傾いた被爆者代表で、アメリカ兵の被爆の歴史研究者森重昭氏を、オバマ大統領が抱き止めたハグの瞬間である。この瞬間を報じる多くのメディアの写真は、森氏の背中に置かれた大統領の大きな手の神聖なまでにそろえた長い指と、目を閉じた両氏の顔の九〇度の交錯を映し出した。それは大統領と市民の和解を結果的に表象する、何びとも予期しえぬ瞬間を生み出したのである。二八日の日本の新聞各紙は一面全面で「オバマ大統領広島訪問」のバナーを打ち、オバマ大統領が原爆ドームを背に「核なき世界追及」の声明を発する写真と文言で埋め尽くされた。保守系メディア読売新聞が、一面左上に大統領の森重昭氏ハグの写真を配していたのが印象的であった。同日の米メディアのうち『ウォールストリート・ジャーナル』も一面中央を、「Visiting

Hiroshima, Obama Offers Regret but no Apology」の見出し²⁾、このハグの瞬間の写真で飾った。このように七一年目に実現したアメリカ大統領の被爆地訪問とメディアが世界に伝播したその言説と映像は、これまでの歴史を、生きた記憶と新たな生に繋ごうとする、とりわけ戦後七〇年に未曾有の高まりを見せた出版の動きや、核批評の変化の延長線上に起こるべくして起こった出来事と捉えることができる。

注

1 本論では、被爆都市としてメディアやスピーチで語られる地名としてはヒロシマを、一般的な都市名としては広島を使用する。

2 オバマ大統領スピーチ原文の引用はニューヨークタイムズ記事二〇一六年五月二八日掲載記事により、日本語訳は同日アメリカ大使館より配信されたものによった。

<https://www.nytimes.com/2016/05/28/world/asia/text-of-president-obamas-speech-in-hiroshima-japan.html> May 29, 2016.

なお日本語訳は必要に応じて変更したところがあることをお断りしたい。

3 アルド・レオポルドの悔悛とは、Leopoldの名作「山のように考える」(『Thinking Like a Mountain』, 1949)において、狼退治に際し銃を向けた狼の縁に燃える目を見たとき、狼退治の愚と間違いを悟り山の生態系を認識する瞬間があり、以後レオポルドが山のエコロジーに目覚めたことをいう。これにちなみ green fire ecology という言葉も生まれた。

4 この点については五月二七日夜出版された『中國新聞』号外に關

連の記事が掲載されている。この記事の分析については以下の拙論で論じた。伊藤詔子「オバマヒロシマ・スピーチを聴く——21世紀環境作家の声とともに」『下河辺美知子教授退職記念論文集』(彩流社、二〇一九年三月刊行予定)

5 引用は Truman Library より以下によった。

<http://www.atomicarchive.com/Docs/ManhattanProject/Bardmemo.shtml> Dec.1, 2016.

6 対というのはアメリカ人らしい。色かざって couple であり、ここから新しい鶴が生まれるとの発想か。日本的な発想では鶴は単体で一羽である。なおアメリカ、ネバダ核実験場前には、折鶴が群生する紫よもぎの白い可憐な花のように無数に結ばれ、砂漠に奉納されている。砂漠の植物への祈りでもあり、これまで核実験により、死の灰 (fallout) で被曝し、なくなった多くのアメリカ人や野生の生きものへの祈りでもある。軍の進入禁止区域を侵してここに押し入り逮捕される核アクティヴィストたちは後を絶たず、日本への想いを千羽鶴のストーリーに重ねているのである。このようなストーリーの共有こそ世界を結ぶ反核の絆である。

引用文献

Blouin, Michael & Morgan Shipley eds., *The Silence of Fallout: Nuclear Criticism in a Post-Cold War World*. Cambridge UP, 2011.

Bradley, John, ed., *Atomic Ghost: Poets Responding to the Nuclear Age*. Minneapolis, MN: Coffee House, 1995.

———. *Learning to Glow: A Nuclear Reader*. Tucson: U of Arizona P, 2000.

Brians, Paul. *Nuclear Holocausts: Atomic War in Fiction, 1895–1984*. Kent,

OH: Kent State UP, 1987.

Cordle, Daniel ed., *States of Suspense: The Nuclear Age, Postmodernism, and United Fiction and Prose*. Manchester, U.K.: Manchester UP, 2008.

Derrida, Jacques. "No Apocalypse, Not Now (Full Speed Ahead, Seven

Missiles, Seven Missives)," trans. Catherine Porter and Philip Lewis,

Diacritics 14.2 (Summer 1984): 20–31.

Hersey, John. *Hiroshima, The Aftermath*. New York: Knopf, 1985.

Itoh, Shoko. "American Nuclear Literature on Hiroshima and Nagasaki."

Oxford Research Encyclopedia, Oct. 2017.

<http://literature.oxfordre.com/view/10.1093/acrefore/9780190201098.001.0001/acrefore-9780190201098-e-165>

Kaminsky, Marc. *The Road from Hiroshima: The Last Tin from Hiroshima*.

New York: Rowman and Littlefield, 2015.

Kono, Juliet. Anshu: Dark Sorrow. A Novel. New York: Anchor, 2010.

Laurence, William L. *Dawn over Zero: The Story of the Atomic Bomb*. New

York: Knopf, 1946.

Lifton, Robert. *Death in Life: Survivors of Hiroshima*. New York: Random

House, 1968.

Morton, Timothy. *Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the*

World. Minneapolis: U of Minnesota P, 2013.

Treat, John W. *Writing Ground Zero: Japanese Literature and the Atomic*

Bomb. Chicago: Chicago UP, 1984.

一谷智子「核批評再考—Araki Yasusada 〇 Dovable [Flohaven]『英文学

研究』86(110111)′ 111—118。

伊藤詔子「核をめぐる言説の日米の協働とこころ」『核と災害の表象—

日米の応答と証言』（熊本早苗、信岡朝子編、英宝社、二〇一五年）、
五―二五。

――『はじめてのソロー―森に息づくメッセージ』NHK出版、二〇
一六年。

川口隆行編著『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社、二〇一七年。

ゴーマン、マイケル「核の不安から核の無関心へ―アメリカの大衆文
化における核イメージの変容―」『原爆文学研究』一五（二〇一六
年）、一一二―一二六。

永川とも子「一九四五年の創世記―ウィリアム・L・ローレンスの広
島・長崎関連記事にみる「宣教」としての原爆報道―」『原爆文学
研究』一四（二〇一五年、三一―三四）。

野坂昭雄「核S・Fと核批評」『〈原爆〉を読む文化事典』三七、op.cit.
二〇三―二〇七。

森重昭『原爆で死んだ米兵秘史』潮書房光人社、二〇一六年。

米山リサ『広島―記憶のポリティクス』小沢弘明、小田島勝浩訳、
岩波書店、二〇〇五年。